平成27年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

『里親等委託推進のための地域基盤づくりに関する研究』（報告書）

研究代表　香川大学　教育学部　竹森元彦

目　　次

１　事業の理念と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
（１）　理念と目的
（２）　重要な「枠組み」について
２　地域基盤づくりプログラムの仕組み（ポイント）・・・・・・・・・・・・・　4
（１）　仕組みのポイント
（２）　プラットフォームの概念の援用
３　事業の全体の流れと講座プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4
（１）事業の全体の流れと講座プログラム
（２）行政・里親のニーズ（事前聞き取り調査）の実施
（３）事業実施（講座の内容・日程）
（４）タイムスケジュール
（５）講演について
（６）ワークショップについて
（７）独自の広報の方法と予想される効果
（８）倫理的配慮
４　効果の検討方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8
５　成果分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
（１）　受講者の分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
①受講者数
②受講者の領域
③受講者年齢構成
④里親の講座受講回数
⑤ワークショップを通して「つながった」人数
（２）心理尺度やアンケートなどによる量的分析・・・・・・・・・・・・・・　12
①里親理解の意識の変化について
②コミュニティ意識の変化について
③ワークショップ受講による体験過程
④事後の最終アンケート調査
（３）インタビューやアンケートによる質的分析　・・・・・・・・・・・・・・　29
①里親への聞き取り（里親会会長）
②里親への聞き取り
③行政への聞き取り
６　まとめ（結論）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　30

別添　資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　32

１　事業の理念と目的

（１）　理念と目的

里親委託は、児童虐待につながる前の子どもとその家族への新たな支援として重要であるといえる。本事業を実施する香川県は、里親委託率の５年間の増加幅でいえば、全国６位（厚生労働省資料）であるが、さらに地域へ里親や里子の理解のある地域基盤づくりの促進や、地域基盤づくりのなかで地域の人に里親になってもらえるようなボトムアップの取り組みが必要である。また、委託率向上が高い福岡などの地方中枢での取り組みではなく、地方中小都市モデルが必要である。

そこで、里親委託推進と地域基盤づくりを組み合わせた本事業を実施する。具体的には、次のような地域基盤づくりプログラムである。

里親の経験者の講演と、地域の多様な課題に関しての地域の実践家による講演（内容：児童虐待、子育て支援、地域づくり等）及び参加者全体によるワークショップを組み合わせた地域支援プログラム（研修講座）を開催し、多様な立場の参加者が各課題について学習するとともに、ワークショップ（語り合う）にて、参加者のつながりを生み、異なった領域同士の相互作用や相互補完・結合・創発を促進することで、里親自身をエンパワーすると同時に、里親理解を深めるようなネットワークづくりを促進する。

それらの研修講座を継続する結果、居場所的な場所として、研修講座が働くと同時に、そのような場創りの中で、里親に理解ある地域づくりを促進し、里親の情報や生の声をそれぞれのネットワークを通して伝えていくことが可能となると予想される。

それらの実践（アクションリサーチ）のエビデンスを通して、社会的養護を支える地域支援ネットワーク形成のためのプログラム開発とその効果を検討して、里親委託推進における地方モデルを提案する。

（２）　重要な「枠組み」について

①地域の多様な人が養育里親のことを知り、理解を深める必要がある。
②里親について行政からの一方通行的な宣伝するのではなく、地域の人と一緒に考えたり、学んだりするような場（場づくり）が必要である。
④しがたって、地域社会全体で子育てをするような意識づくりが必要である。
⑤地域の子育ての課題は、里親が養育するうえでの課題と直結している。
⑥したがって、里親になる人は、地域の子育ての課題について、多様な情報や現状を知ることが必要である。
⑦里親自身も、子育てが孤立する（孤育て）ことなく、他の領域の人と顔見知りとなり、ネットワークづくりを進めることが重要である。
⑧里親をする難しさを相談できるように、里親自身も地域子育て支援活動や人脈についてよく知っておくことが重要である。
⑨これらの地域社会の基盤づくりを進める中で、里親登録も増加すると考えられる。

２　地域基盤づくりプログラムの仕組み（ポイント）

（１）仕組みのポイント

①里親、里親支援者、異なる領域関係者、行政との間の情報や交流を促す。

②地元の社会資源（講演者とそのネットワーク）を活用する。

③異なる領域（里親やその関係者だけではなく、地域の課題、子育て支援、地域づくりを含む）により、情報と行動の交流と相互補完・結合を促す。

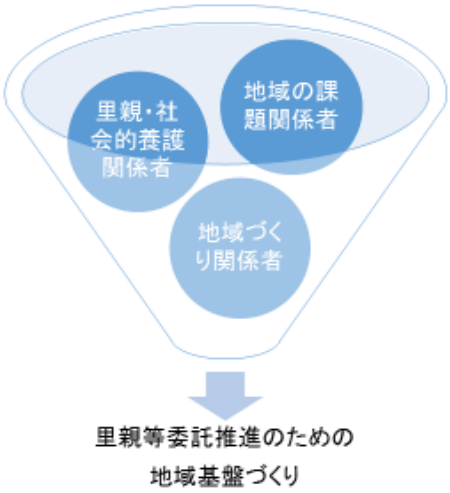
④「ワークショップ（対話）」を仕組みに取り入れて、人と人をつなぐ。

⑤異なる領域間の人と人をつなぎ（Win-Win の関係）　、地域基盤づくりを促す（プラットフォームとしての機能）。

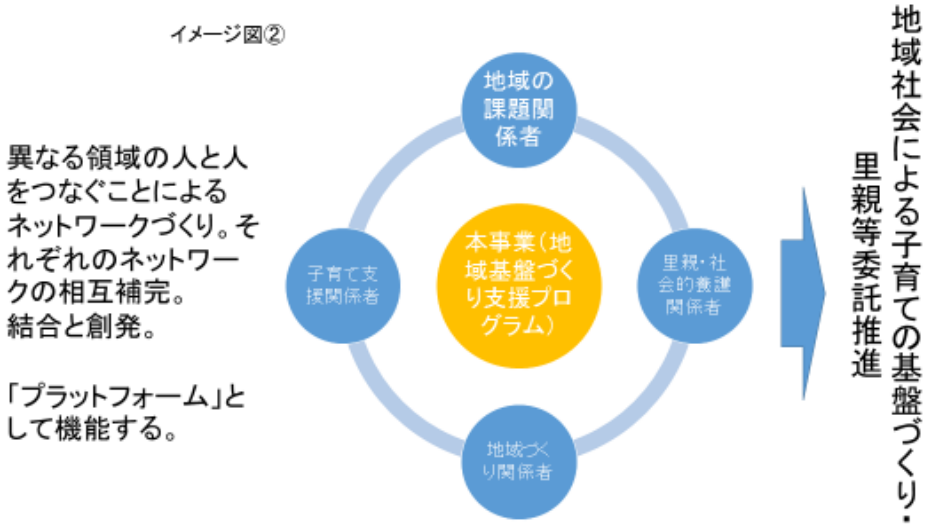
⑥個々の主体が持つ力が単純な和を超えて、相乗効果で二次関数的に大きな力や創発の力が発生する（プラットフォームとしての機能）。

⑦地域基盤づくり（ネットワークづくり）を促すと同時に、その間での里親に関する情報共有、行動共有によって、里親委託など推進される。

イメージ図①



本事業（地域基盤づくり支援プログラム）



（３）　「プラットフォーム」概念の援用

マーケティングの「プラットフォーム」は、次のような機能を持っている。

・多様な主体を結合させてあらたな価値を生むであろう。

・個々の主体が持つ力が単純な和を超えて、相乗効果で二次関数的に大きな力を生みだすであろう。

・またそこでは、創発の力が発生する機会がある。ここでの創発的な価値創造とは、必ずしも特定の帰結をあらかじめ想定することなく、多くのプレーヤーが活動をしているうちに、多様な資源が結合して予想もしなかった新しい価値が次々に生まれる状態を指す。

（日本マーケティング協会ＨＰより）

このプラットフォーム概念を、里親委託など地域基盤づくりの説明に援用できる。

3　事業の全体の流れと講座プログラム

（1）　事業の全体の流れと講座プログラム

（２）行政・里親のニーズ（事前聞き取り調査）の実施

・県の行政への聞き取り：児童相談所里親担当者（１月２２日）

養育里親の数が増えず、緊急の事態に対応できない場合がある。もっと、一般の方に、養育里親の情報を知らせ、理解ある地域社会づくりをすすめるとともに、登録数も増やしたい。

・里親への聞き取り：里親会長（１月２８日）、里親会理事（１月２６日）

里親は、孤立せずに、地域の中で子育てをするような意識をもつべき。また、里親と里子を支えてくれる地域社会づくりが必要。

（３）事業実施（講座の内容・日程）　＊別添資料：チラシ参照

第１講座（2/12）　子育てをめぐる地域や家族の抱える課題
　　－不登校・ひきこもり・児童虐待のいま－

第２講座（2/23）　地域社会による子育て（社会的養護）の現状と未来

第３講座（3/2）　親子の心を結ぶために　－親子関係の力を拓く－

第４講座（3/11）　地域で育つ子どもたち、居場所でつながる大人たち

（４）タイムスケジュール

タイムスケジュール

10:00　趣旨説明と承諾書による説明と同意
10:20　講演①、講演②
11:20　休憩・リラクゼーション
11:30　講演③
12:20　質問
12:30　終了・アンケート調査への記入
（12:30～13:30　休憩）
13:30　ワークショップの趣旨説明
13:30　サークル形態で自己紹介とコメント（一人2分程度）
14:00　5人程度の班グループに分かれて、意見交換
14:40　サークル形態にもどって、班ごとの発表とシェア
15:00　終了・アンケート調査への記入

（５）講演について

・内容：３名の講演（一人３０～４０分程度）。

・進め方：

①１人目、２人目の講演

②１０分程度の休憩・リラクゼーション

③３人目の講演

④１～２人程度の質問を受ける。

・ねらい：講演者が、それぞれの立場から当事者の視点から講演をすることで、受講者に、知識や現状・課題を共感的に知ってもらうとともに、テーマについての多様な視点を提案することによって、包括的な学びを促進し、あわせて、講演者と受講者の顔を見合わせてのつながりを促進することを目的とする。

（６）ワークショップについて

・内容：講演終了後、休憩（１時間程度）後、ワークショップを実施する。

・進め方：

①椅子を円陣にして設置し、顔を見合わせて座席する。

②ファシリテーターがワークショップの趣旨などを説明する。

③順番に、１～２分程度、受講した動機や感想などを発言する。

④４～５人程度の班にわかれて講演を通して話し合いをする（３０～４０分程度）

⑤円陣の椅子に戻り、班での話し合いを発表・シェアする。

⑥ファシリテーターが全体のまとめを行う。

・ねらい：講演の感想などを伝え合うこと、自分の立場について紹介することによって、多様な領域の受講者同士の対話によってネットワークづくりをすすめる。異なる領域間のネットワークづくり、相互補完。結合と創発を促進する。

ワークショップの様子（第4講座の例）

サークル状になって自己紹介・コメント

小グループに分かれて、話し合い（対話）

（７）独自の広報の方法と予想される効果

（特徴１）　講演者自身に、広報を依頼する。また、関係する各ネットワークの所属団体に「後援」を依頼する。

（特徴２）　県のトップダウンによる広報、目玉となる有名な講演者に依存せず、関係ネットワークの口コミによる広報を行った。

　この独自の方法によって、次のメリットがある。

①講演者のネットワークを通して情報が伝わり、この度の趣旨に賛同される方・情報を必要としている方の受講につながる。

②講演者のネットワークと他の講演者の異なる領域のネットワークを結びつけることとなる。

③受講者互いの生の情報が、相互のネットワークを通して伝わる。

④地域活動を行っている活動家が集まることで、受講者同士の相互補完・結合、支援関係を促進できる。

⑤経済的効果：地域の社会資源を重視することによって、県外の講演者などへの謝金なども不要であるので経費削減につながる。

（８）倫理的配慮

　受講者に対して、本事業がモデル調査事業である趣旨を説明し、アンケート調査や場合によっては、インタビュー調査を受けることについて承諾を求め、「調査協力承諾書」にサインを得る。

４　効果の検討方法

次の複数の調査を実施する。アンケートなどの量的調査にくわえて、インタビューや自由記述などを含む質的調査をおこなって、その両面からプログラムの効果の質と量を検討する。

①事業（講座）前のインタビュー調査
②事前（ベースライン）、講演後、ワークショップ後に「心理尺度」を実施して効果測定
③各回終了後の「振り返りシート」（自由記述）
④事業（講座）後の郵送によるアンケート調査
⑤事業（講座）後のインタビュー調査
⑥使用した「心理尺度」と実施時

＜里親理解の尺度・アンケート＞（独自に作成）

実施講座：第２講座のみに実施
実施時　：講義前（ベースライン）、講義後
測定内容：「里親当事者の講義によってどのように意識が変わるのか」

＜コミュニティ意識尺度＞：石盛ら（２０１３）の尺度を参照に作成

実施講座：第１講座～第４講座
実施時：講義前（ベースライン）、講義後、ワークショップ後
測定内容：「講座の進展によって、どのようにコミュニティ意識が変わるのか、各講座によってどのようにコミュニティ意識が変わるのか」

「コミュニティ意識」尺度は、コミュニティ全体（全体）とその下位尺度①連帯・積極性、②自己決定、③地域への愛着、④他者依頼、⑤子育ての社会化、によって構成されている。（別添資料参照）　『石盛真徳・岡本卓也・加藤潤三（２０１３）コミュニティ意識尺度（短縮版）の開発　実験社会心理学研究第 53 巻第１号　p22-29』を参照に、独自の項目（子育ての社会化）3 項目を加えた。

＜体験過程尺度＞：「ＳＧＥ体験評価尺度」（水野，２０１３）を用いた（別添資料参照）。

実施講座：第１講座～第４講座
実施時：ワークショップ後
測定内容：「ワークショップはどのような体験であったのか」

『水野　邦夫（２０１３）構成的グループ・エンカウンターにおける体験の測定　－ＳＧＥ体験評価尺度作成の試み－　帝塚山大学心理学部紀要第 2 号　pp41-56』

５　成果分析

（１）　受講者の分析

①　受講者数

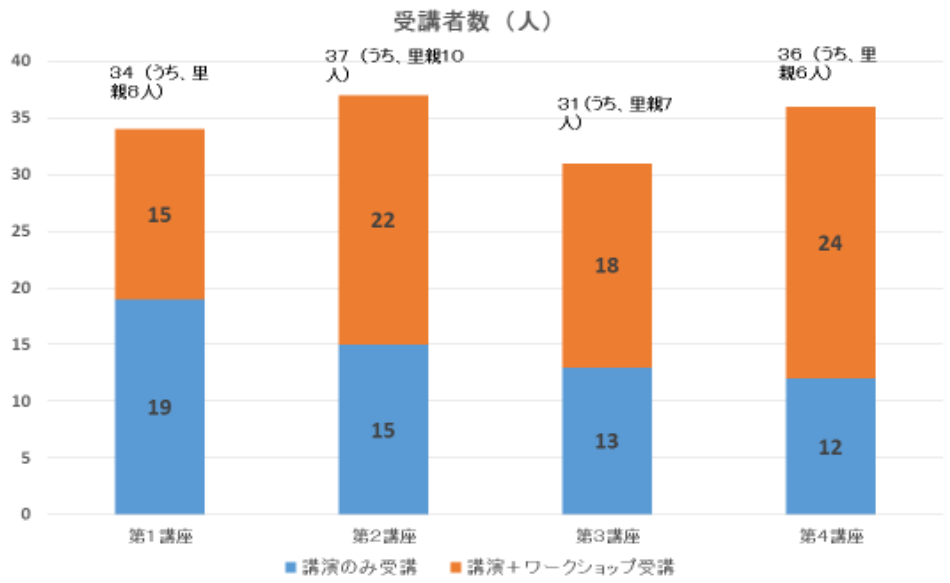
・受講者は、実数８５名。各回３５名前後であった（延べ１５０名程度）。

・時間系列的にみると、講演のみの受講者は漸減して、ワークショップへの参加が漸増している。

・最も受講者数が多かったのは、第２講座（社会的養護）であった。次が、第４講座（地域づくり）であった。

・里親の受講に関しては、第２講座のみならず、第３講座、第４講座と継続受講者が多い。

・里親にとって、第２講座以外の受講のメリットや学ぶべき点が多かったと考えられる。



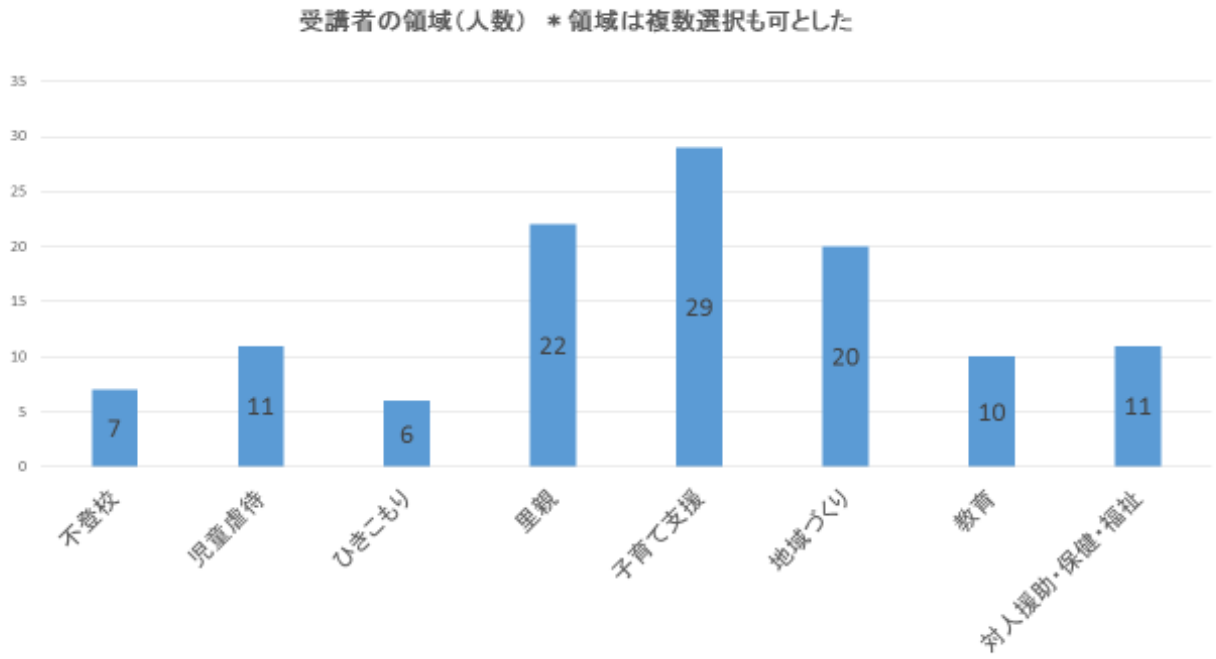
②受講者の領域

・多様な領域からの受講者がいることがわかる。

・里親の情報を、他の領域の人が知り、またほかの領域の情報を里親が知ることを促進することができる。

・異なる領域の人と人が、顔を見てのワークショップによってつながることができる。

・ワークショップによって、領域ごとの縦割りから、領域間の交流（協働）が生じて、そして、地域基盤づくりへとつなげることができる。

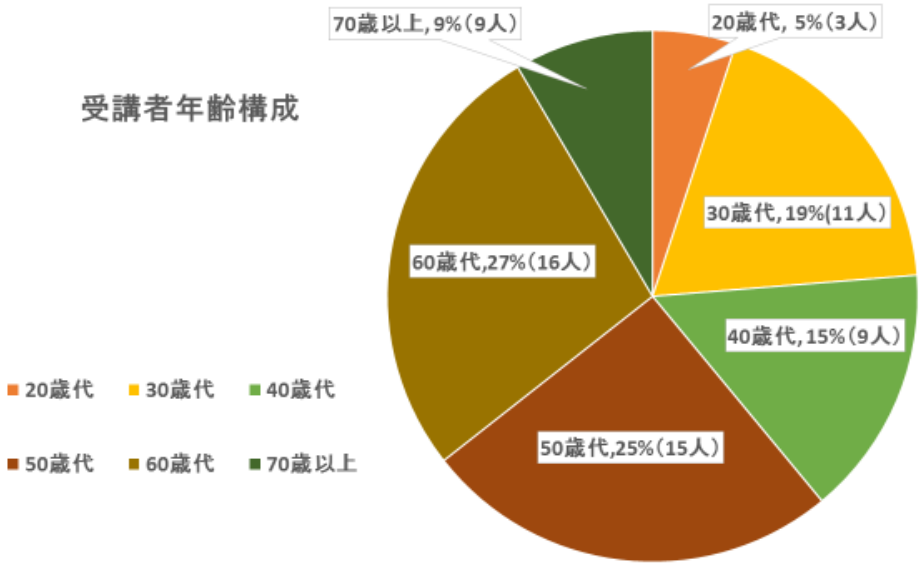


③受講者年齢構成

・受講者は、２０代～７０以上に多様な年代の幅が広い。

・これは、社会的養護だけではなく、子育て支援、地域づくりなどをテーマとしたために、多様な年代の方々が集まったと考えられる。

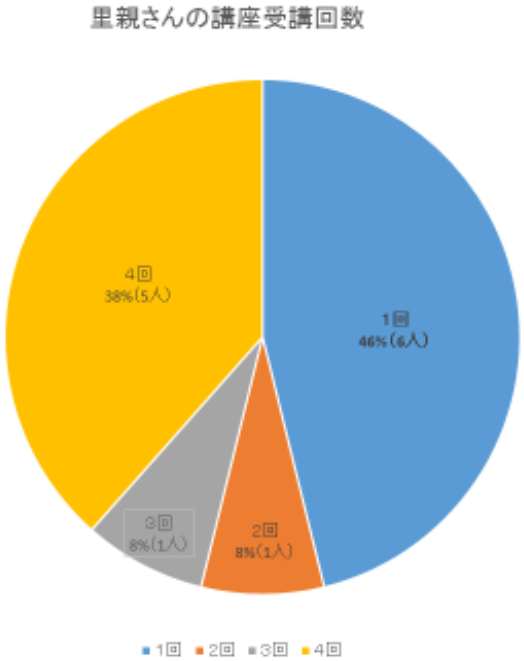
・養育里親としては、４０代～６０代がターゲットとなると思われるが、その割合は全体の６７％を占め、養育里親の現状や情報を地域の多様な層につたえる上で、４つのテーマ設定が適切であったと考えられる。



③里親の講座受講回数

・里親の受講は、社会的養護に関する第 2 講座から継続して受講している者（3 講座以上受講者）が、約半数（48%）を占める。

・平日での開催であったこと、連絡もギリギリの開催であったこと、第 2 講座（里親会の講演）のみを聞きに来た可能性もあることなどを踏まえると、高い受講継続率である。これからも、本研修の仕組み（多領域の学びあい）が有効であったことが推察される。



④ワークショップを通して「つながった」人数

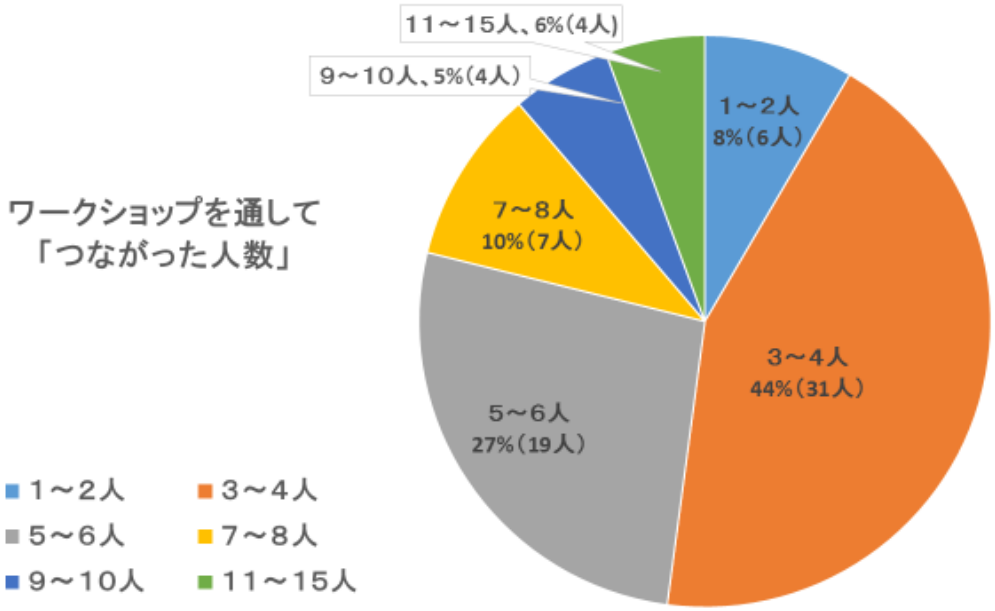
・ワークショップを通して、「つながった」人数の記載を求めた。

・結果、少なくとも、１～２人、多い人では、１５人もの人と対話をしたり、名刺交換などを行っていることがわかった。

・「講演だけ」ではなく、「ワークショップ」という形態が、人と人をつなぐことがわかった。

・短時間ではあるが、非常に多くの人と積極的につながっていることがわかった。

・地域基盤づくりを進める上で有効であることがわかった。

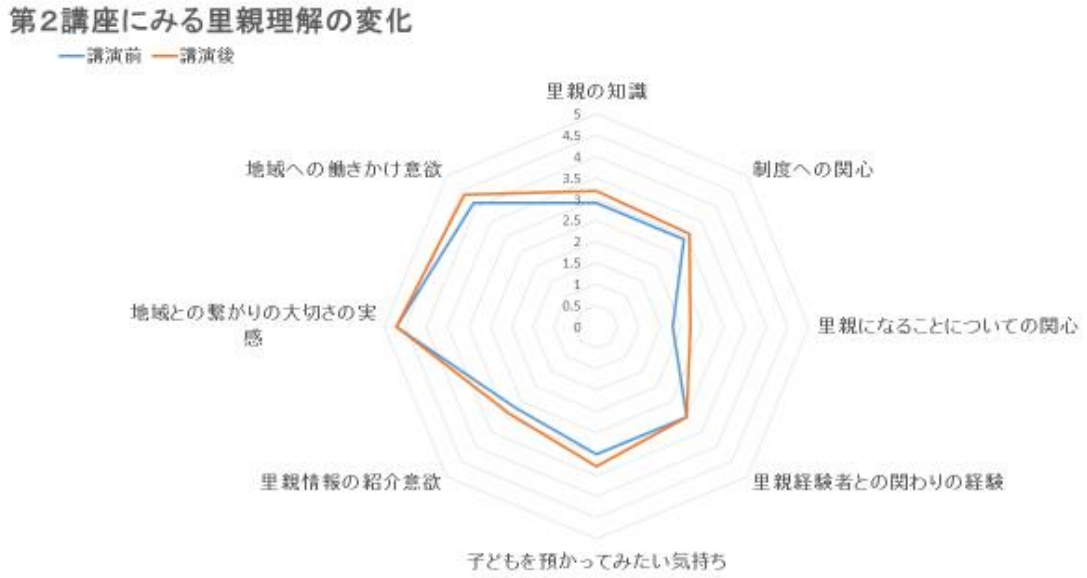


（２）心理尺度やアンケートなどによる量的分析

① 里親理解の意識の変化について

第２講座（講演のみ受講者）における「里親理解の意識」の変化（講演受講前と受講後）について調査した。その結果、全体（平均）をみると、各下位項目において、講演受講前（ベースライン）に比して高くなっている。

特に、「里親の知識」、「制度への関心」、「里親になることのついての関心」、「子どもを預かってみたい気持ち」、「地域への働きかけ」が高まっている。



次に、下位項目ごとの結果は、以下の通りであった。

・「里親の知識」については、当事者や行政の講演をきいて、「聞いたことがある」が激減して、「知っている」「よく知っている」が増えている。当事者の講演をきくことが、知識を得る上では重要であることがわかる。

・「里親制度への関心」については、ほぼ、横ばい状態である。

・「里親になることへの関心」については、「あまり関心がない」が減り、「少し関心がある」が大幅増である。「関心がある」も増えている。

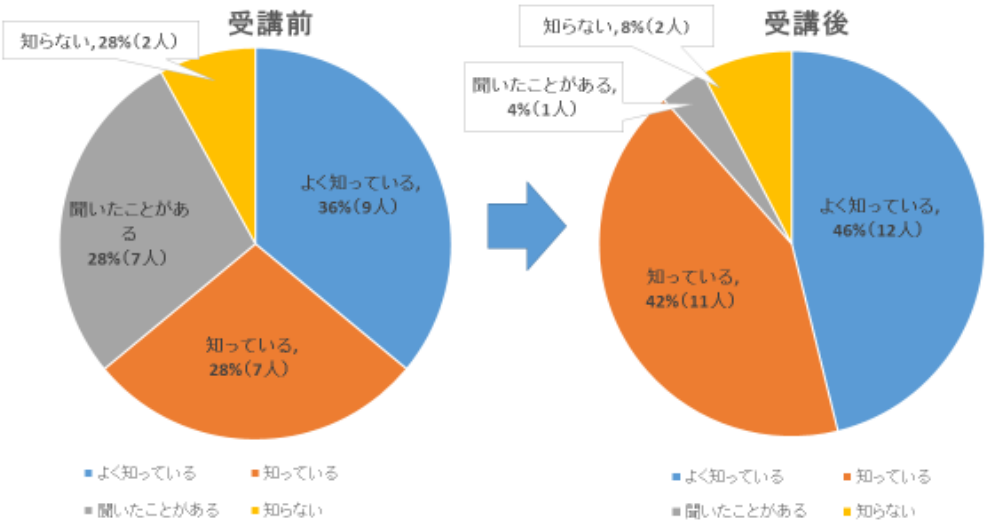
・「里親経験者との関わりの経験」については、横ばい状態である。講演だけの効果をみたので、変化がほとんどなかったと考えられる。ワークショップ後にとると、多くの変化があったことが予想される。

・「里親になってみたい気持ち」については、「なってみたい」が１名⇒3名と増加している。2人増は、見た目に少ない印象であるが、大きな成果である。「なるつもりがあまりない」が減少している。「なるつもりが全くない」も、3名⇒1名に減少している。当事者の講演会や行政の説明は、里親になりたいと思う気持ちにもよい影響を及ぼすことがわかる。

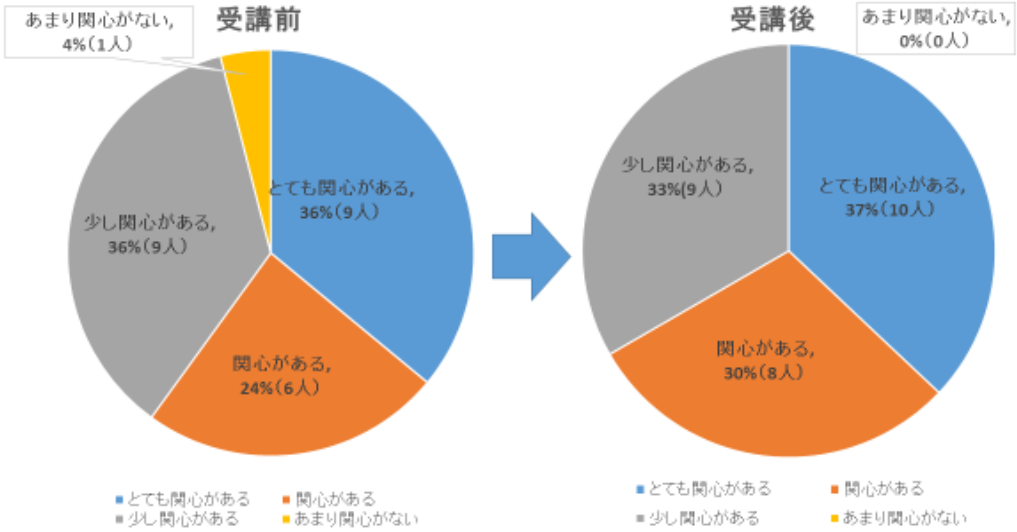
・「里親情報の紹介意欲」については、「よくわからない」が若干減少している。「説明したい」が若干増えている。

・「地域との繋がりの大切さの実感」では、「そう思う」が若干増えて、「とてもそう思う」が若干減っている。「地域へ働きかけたい気持ち」は、横ばいであった。これら２つの項目は、ワークショップの後であればもっと増加した項目であると考えられる。つまり、項目によっては、講演の効果がある項目と、ワークショップなどによる効果が想定される項目があることが予想された。

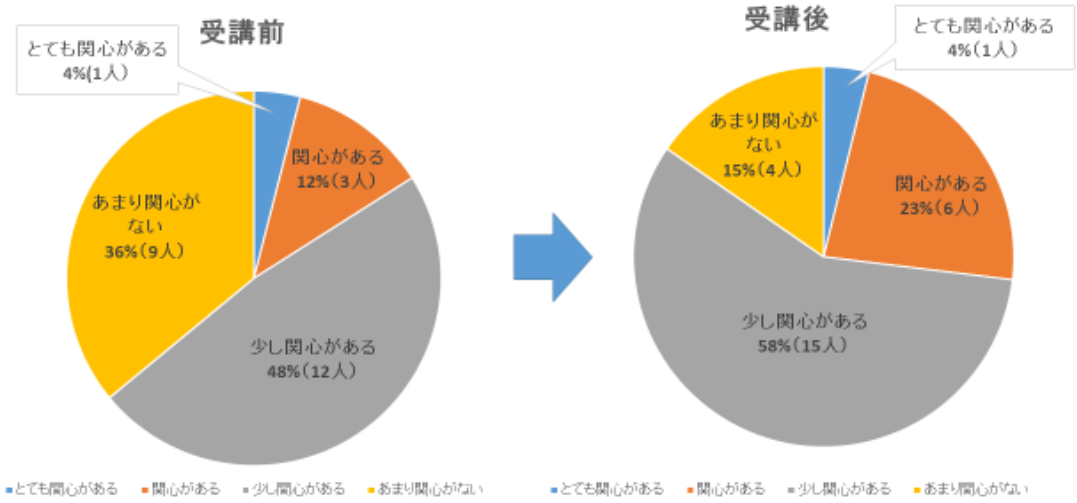
第２講座にみる里親理解の変化　～里親についての知識～



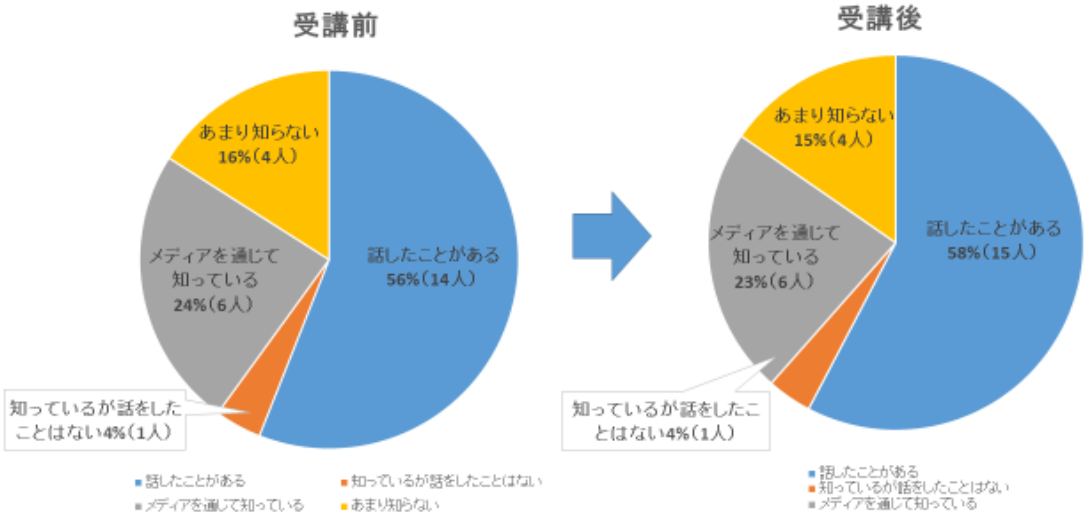
第２講座にみる里親理解の変化　～里親制度への関心～



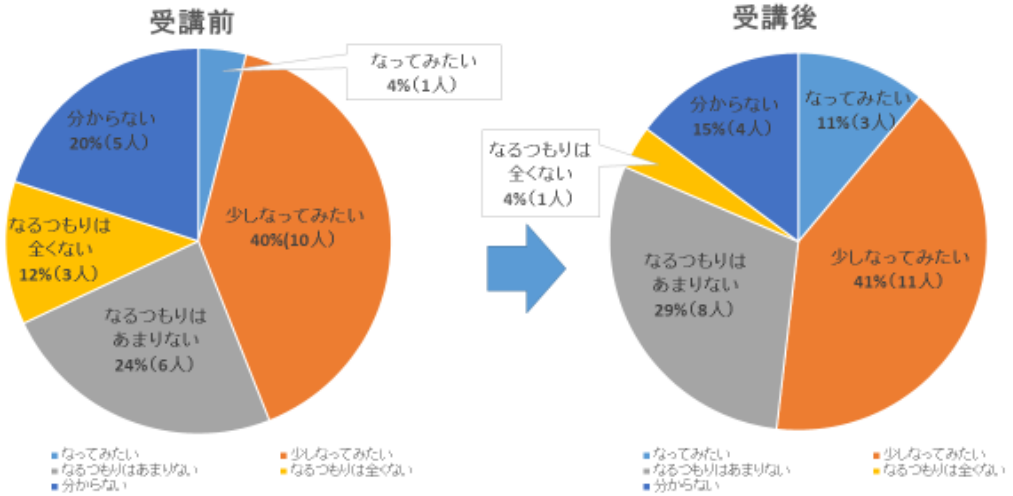
第２講座にみる里親理解の変化　～里親になることへの関心～



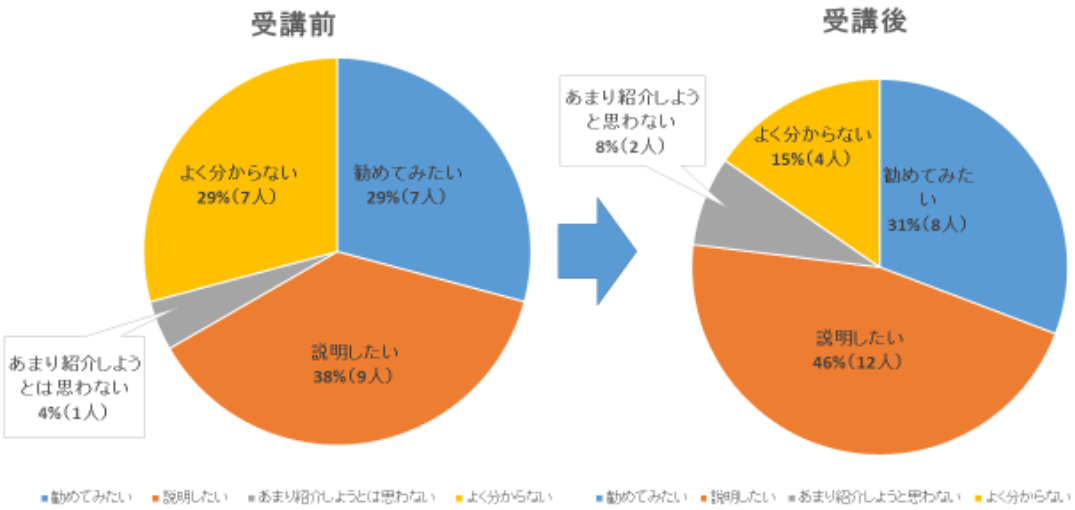
第２講座にみる里親理解の変化　～里親経験者との関わりの経験～



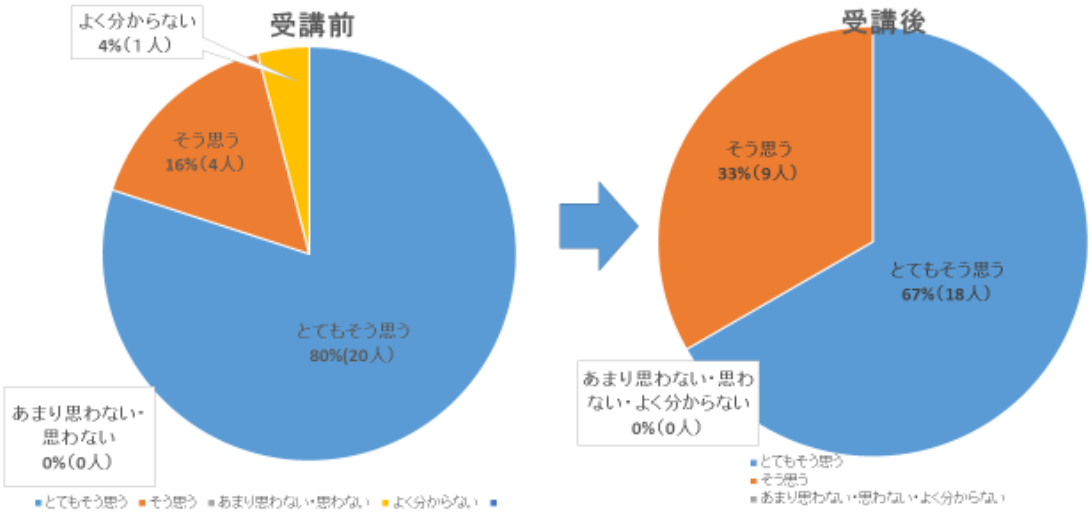
第２講座にみる里親理解の変化　～里親になってみたい気持ち～



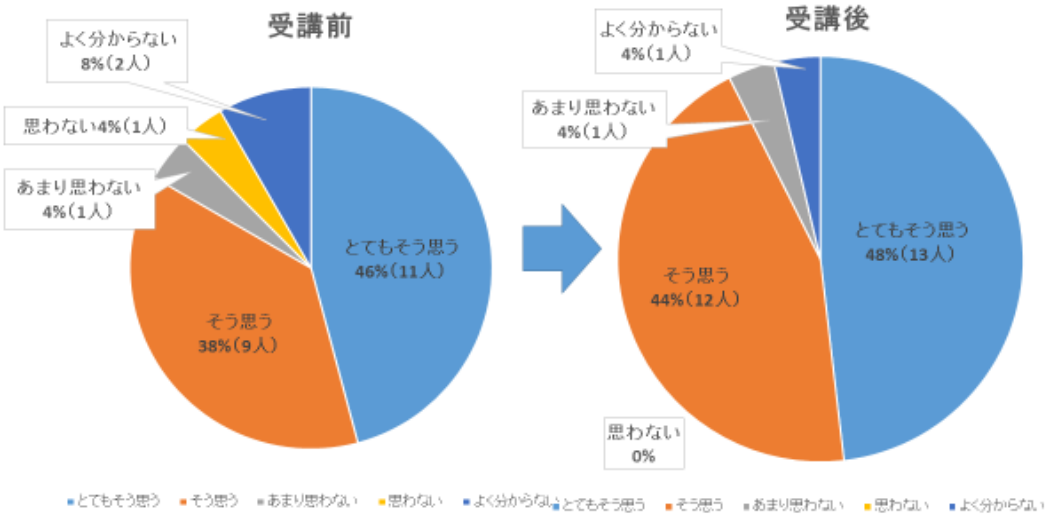
第２講座にみる里親理解の変化　～里親情報の紹介意欲～



第２講座にみる里親理解の変化　　～地域との繋がりの大切さの実感～



第２講座にみる里親理解の変化　　～地域へ働きかけたい気持ち～

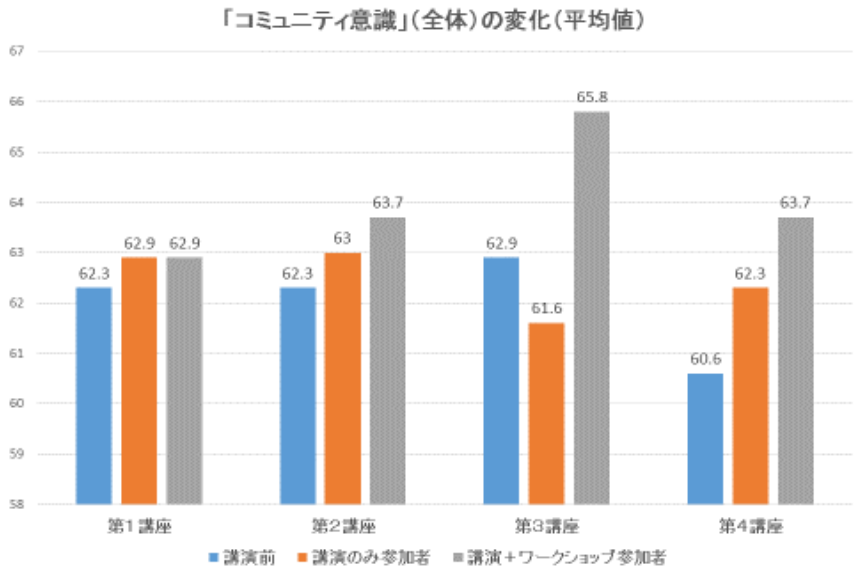


② コミュニティ意識の変化について

４講座の時系列にて、コミュニティ意識（全体）の変化をみる。次に、コミュニティ意識の下位尺度ごとの、４講座の時系列の変化をみる。

〇コミュニティ意識（全体）の時系列の変化（平均値）

全体的に、講演前（ベースライン）に比して、講演後、ワークショップ後の順に高くなっている様子がわかる。第３講座（子育て支援）に関しては、もともと意識が高いが、講演をきいて、コミュニティ意識がいったん低まるが、ワークショップ後に非常に高い値を示している。ワークショップによって、受講者同士の交流があって、それがコミュニティ意識を押し上げていると想定できる。それは、特に子育て支援において有益であることが推察される。



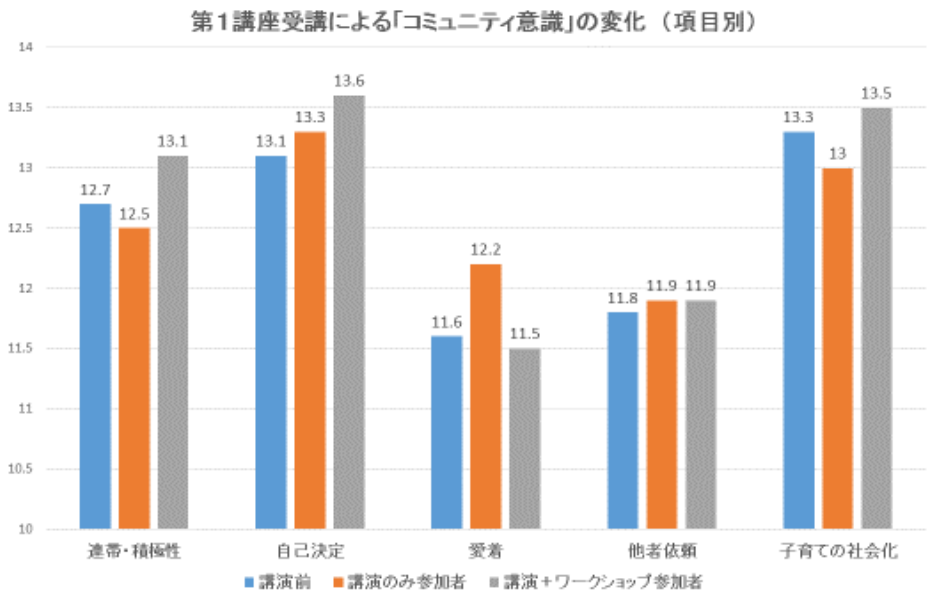
次に、各回講座別にみた下位項目の値（平均値）について検討する。

〇第１講座受講による「コミュニティ意識」の変化

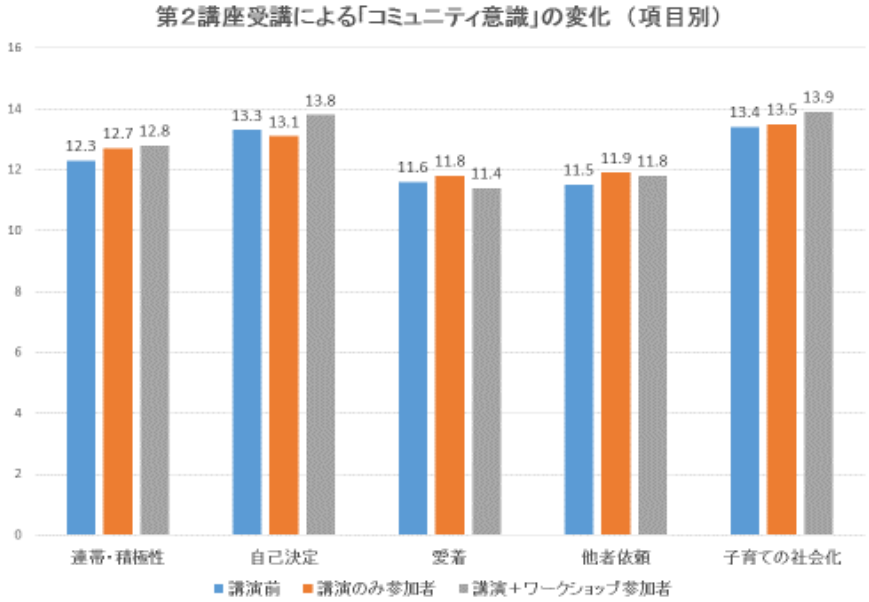
愛着を除く他の項目に漸増しているが、他の講座に比べて、不登校やひきこもりなど個人的な視点である内容であるので、愛着や他者依頼が少ない。

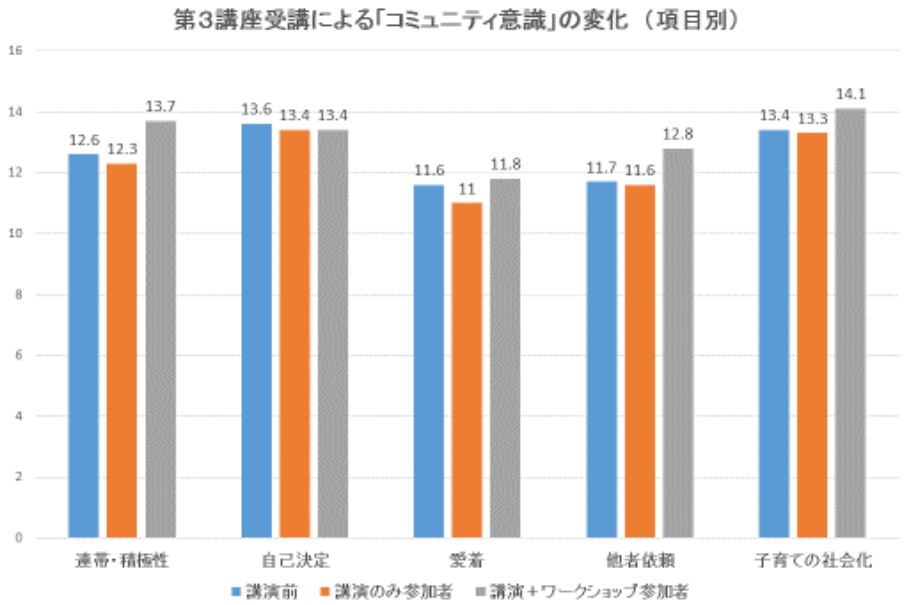
これは逆に言うと、不登校やひきこもり、児童虐待のテーマである場合、「愛着」や「他者依頼」まで視野に入りにくいがあることがわかる。

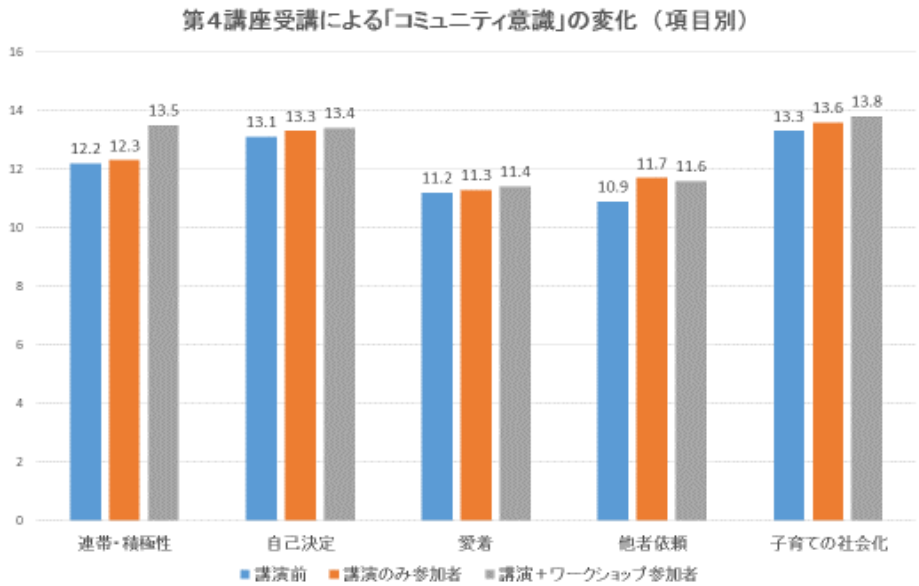
つまり、そのテーマだけではなく、「子育て」や「地域づくり」の講座内容も同時に開催したほうが、閉鎖的にならないですむ可能性がある。



○第 2 講座～第 4 講座においては、どの講座も、高い「コミュニティ意識」をもっている人が受講された可能性が高い。全体的に、どの項目も、講演前にくらべて、講演後、ワークショップ後において微増している。

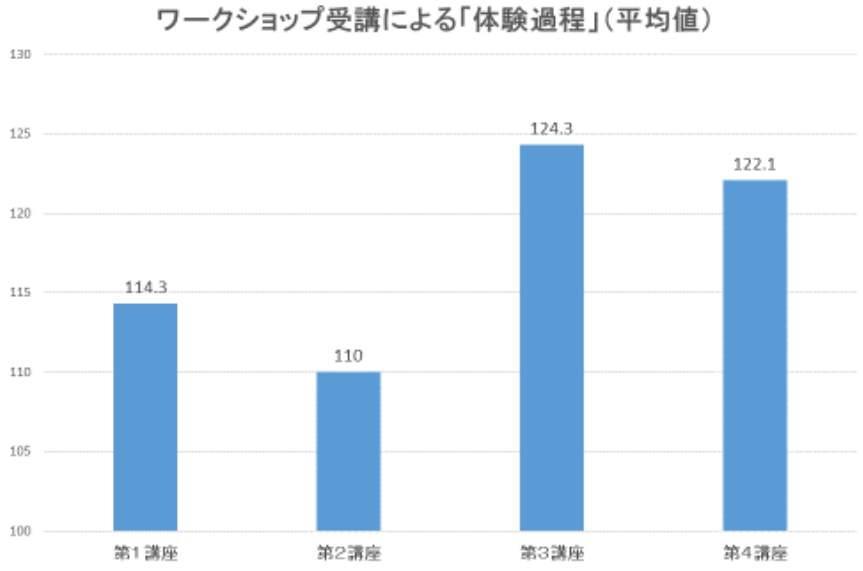



第3講座受講による「コミュニティ意識」の変化（項目別）
16
14
12
10
8
6
4
2
0
12.6
12.3
13.7
13.6
13.4
13.4
11.6
11
11.8
11.7
11.6
12.8
13.4
13.3
14.1
連帯・積極性
自己決定
愛着
他者依頼
子育ての社会化
講演前
講演のみ参加者
講演＋ワークショップ参加者


第4講座受講による「コミュニティ意識」の変化（項目別）
16
14
12
10
8
6
4
2
0
12.2
12.3
13.5
13.1
13.3
13.4
11.2
11.3
11.4
10.9
11.7
11.6
13.3
13.6
13.8
連帯・積極性
自己決定
愛着
他者依頼
子育ての社会化
講演前
講演のみ参加者
講演＋ワークショップ参加者

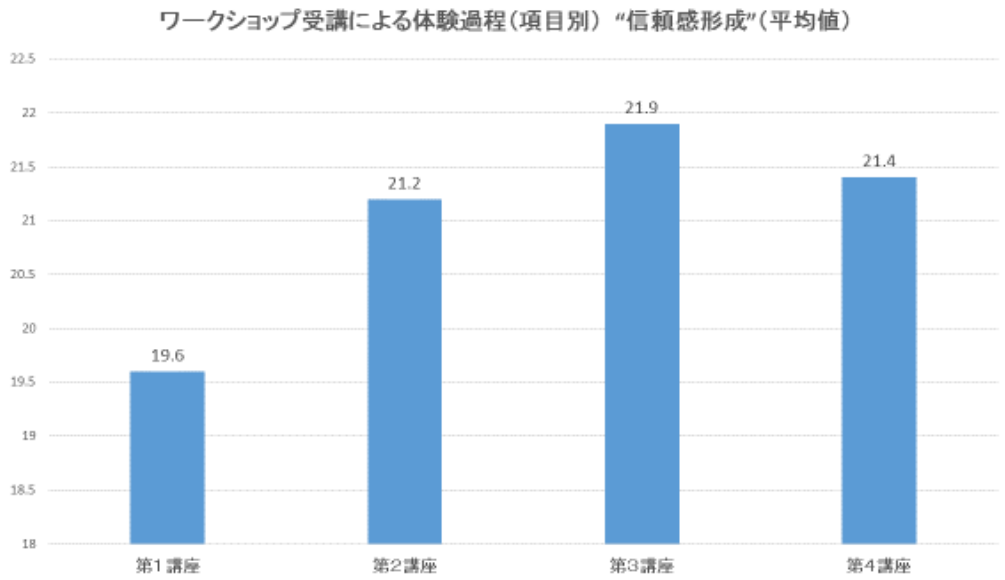
③ 受講による体験過程

講座別にみたワークショップ受講による「体験過程」の変化（平均値）では、第 3 講座（子育て支援）、第 4 講座（地域の居場所づくり）において、体験過程を強く感じていたことがわかる。

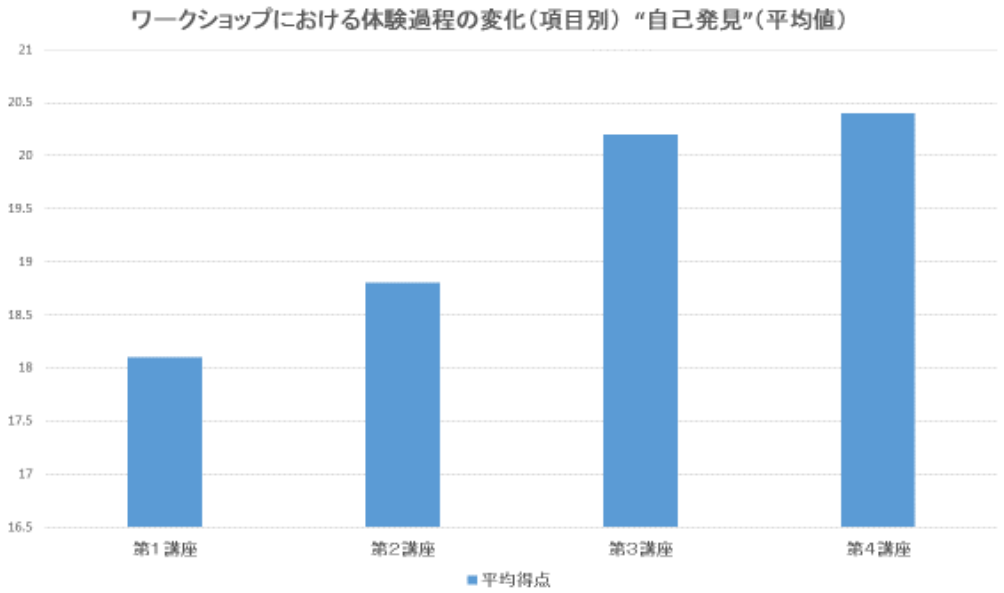


「信頼感形成」においては、第 3 講座（子育て支援）が最も高く、第 2（社会的養護）、第 4（地域の居場所づくり）が次ぐ。第 1 講座（不登校・ひきこもり・児童虐待）は、信頼感を形成するというよりも、「違和感」を感じた内容であった。

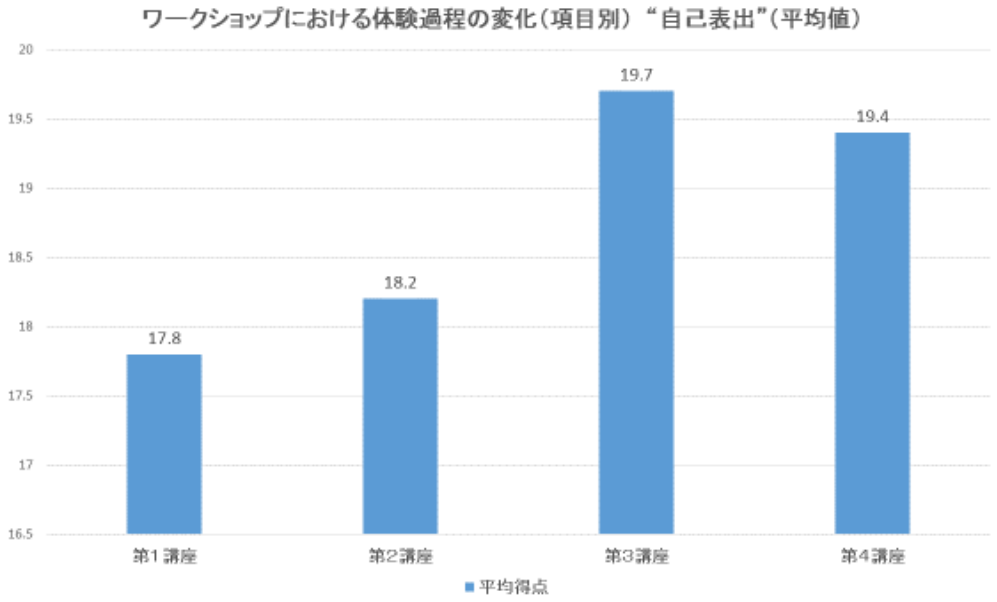
この「違和感」は、これまでの価値観と異なっているという印象であり、深い影響を与えるような内容であるとも考えられる。第 1 講座は、すべての項目において、もっとも低かった。これらが低いことは、他の講座内容とは異質な内容であり、多面的な理解において、有益な講座であったともいえる。



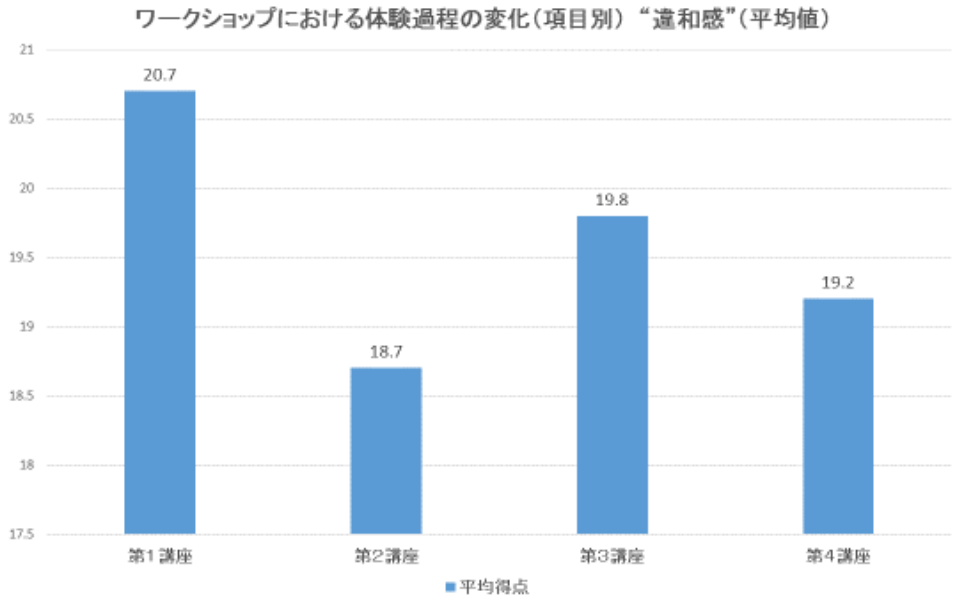
「自己発見」においては、第 4 講座（地域づくり）、第 3 講座（子育て支援）という順で高く、第 2 講座（社会的養護）はその次である。「自己発見」は、地域づくりと居場所をテーマとした内容であることと関係しているように考えられる。



「自己表出」においては、第 3 講座（子育て支援）が最も高く、身近な問題であり、表出しやすいことが考えられる。子育て支援の問題をテーマに入れることは、自己表出を促進すると考えられる。

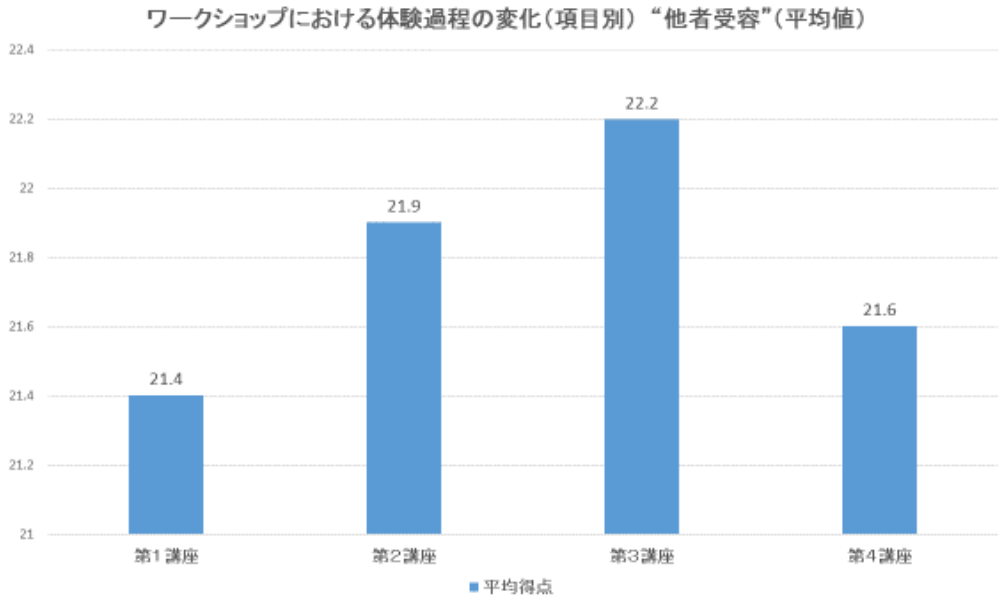


「違和感」においては、第２講座（社会的養護）は、最も低かった。これは、子育ての延長として受け入れやすい内容であるのかもしれない。つまり、ワークショップなどで、子育ての問題の延長上で理解できると、違和感がなく受け入れることができるといえるかもしれない。

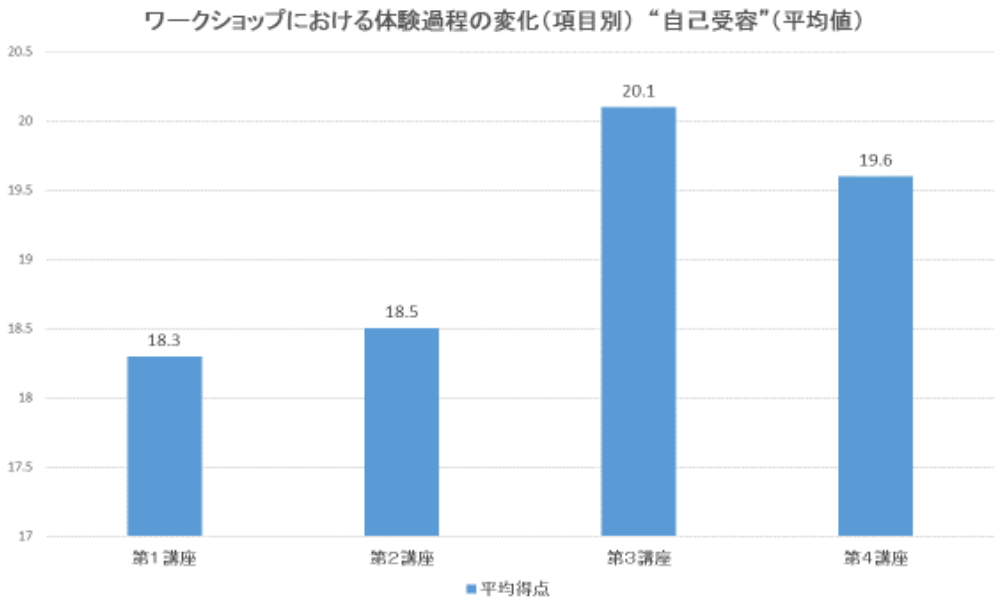


「他者受容」においては、第 3 講座（子育て支援）が最も高く、次いで第 2 講座（社会的養護）であった。ワークショップによって、地域での子育てとして、「他者を受け入れる」ことの重要性を促進すると考えられる。

それに比べて、不登校・ひきこもり・児童虐待は、子育ての問題であるにも関わらず、閉鎖性が強いためか、他者受容につながりにくかった。



「自己受容」においても、第 3 講座（子育て支援）が最も高く、次いで、第 4 講座（地域づくり）、第 2 講座（社会的養護）、第 1 講座（不登校・ひきこもり・児童虐待）はほぼ同じぐらいであった。「自己受容」を進めやすいテーマは、子育て支援、地域づくりであった。これらはどちらも地域づくりと関係している内容である。社会的養護、不登校・ひきこもり・児童虐待は、自身を受け入れる経験にはなりにくかったようである。



これから、第２講座（社会的養護）だけでは、ワークショップを行っても、限定的な変化しか生じないことがわかる。第３（子育て支援）、第４講座（地域づくり）において大きな変化が生じている。

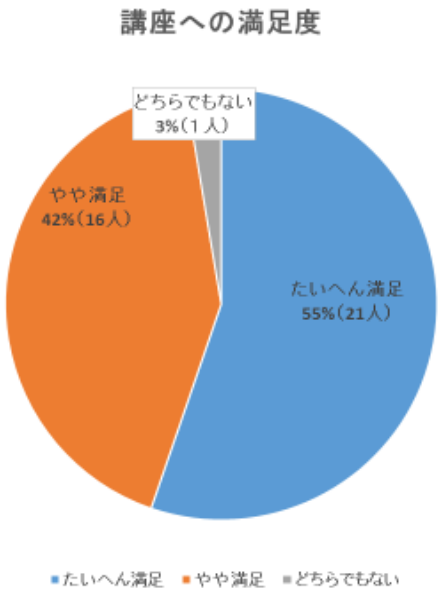
また、第１講座を受講したことによって、「違和感」を主とした新たな価値観を生ぜしめる可能性を含んでいると考えられる。

④　最終アンケート調査結果（郵送による。回収５３．８％）

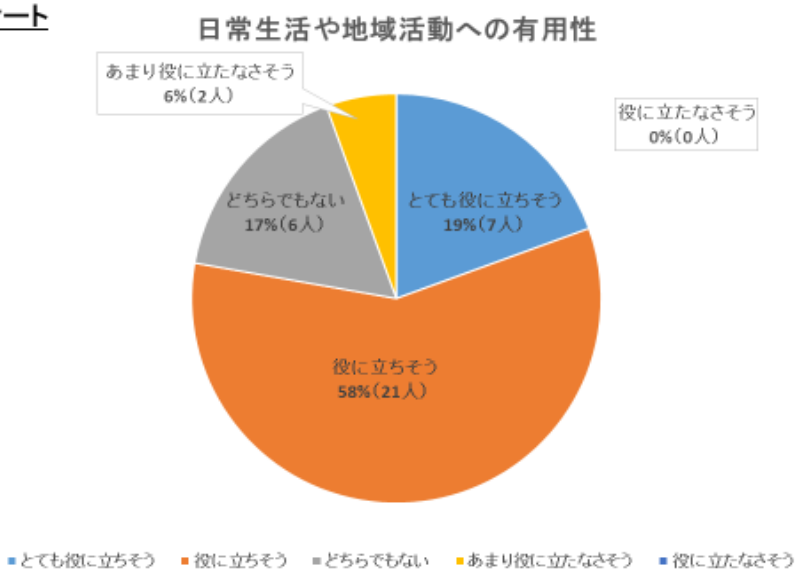
講座への満足度は、「やや満足」と「たいへん満足」をあわせると、９７％であった。

受講してよかった点は、ワークショップの有効性については低いものの、全体的に高い結果となっている。特に、「地域の支援者自身の講演」「横のつながりの重要性」「参加者の熱意や前向きさ」「社会的養護の連携の重要性」「当事者の語りによる説得力」など、受講者や講演者の顔が見える場であったことが受講してよかった点として挙げられている。

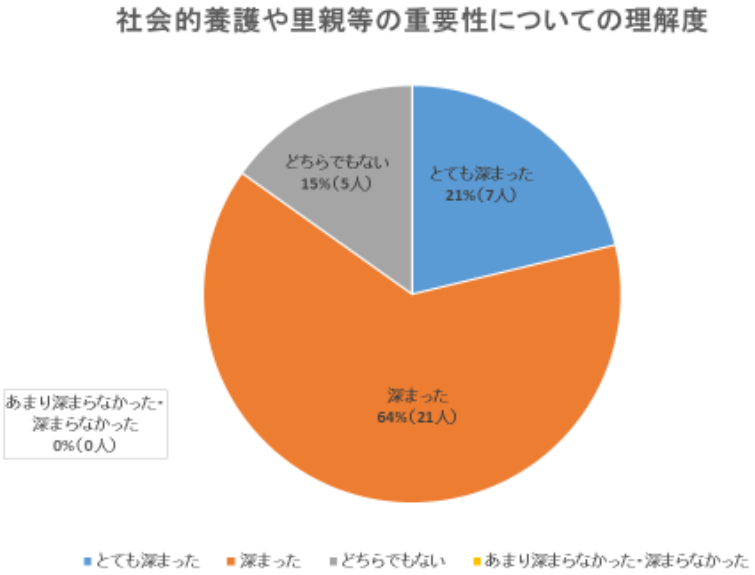
最終アンケート



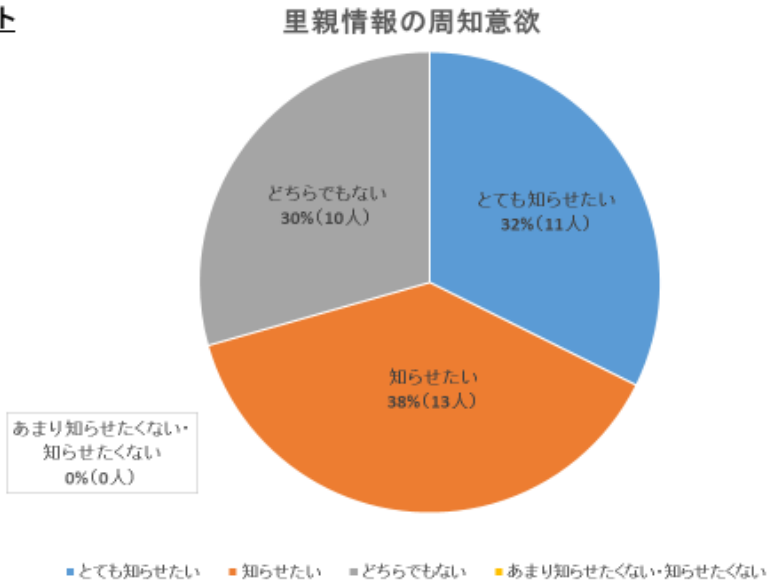
最終アンケート



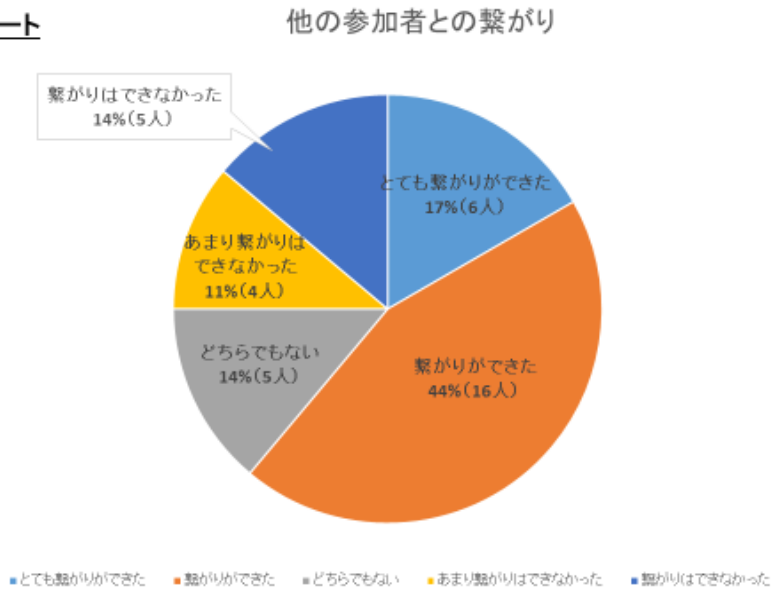
最終アンケート



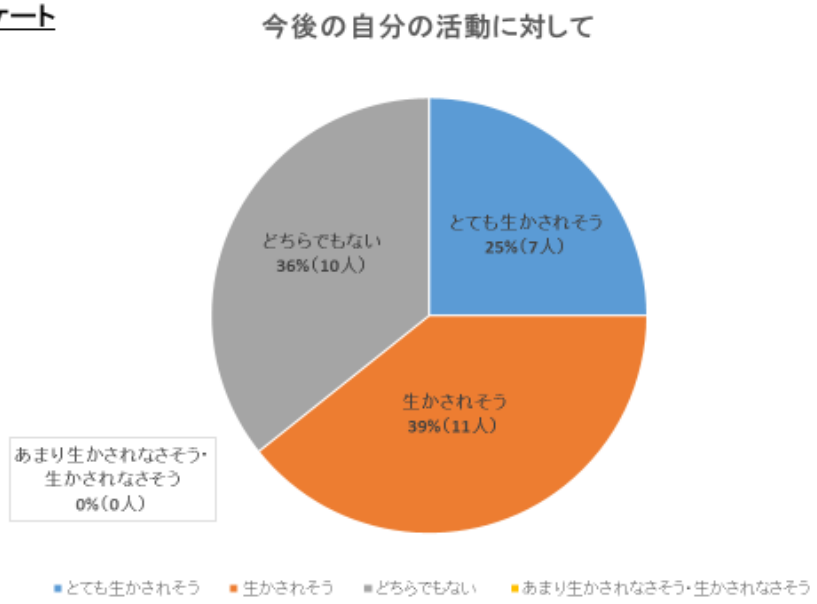
最終アンケート



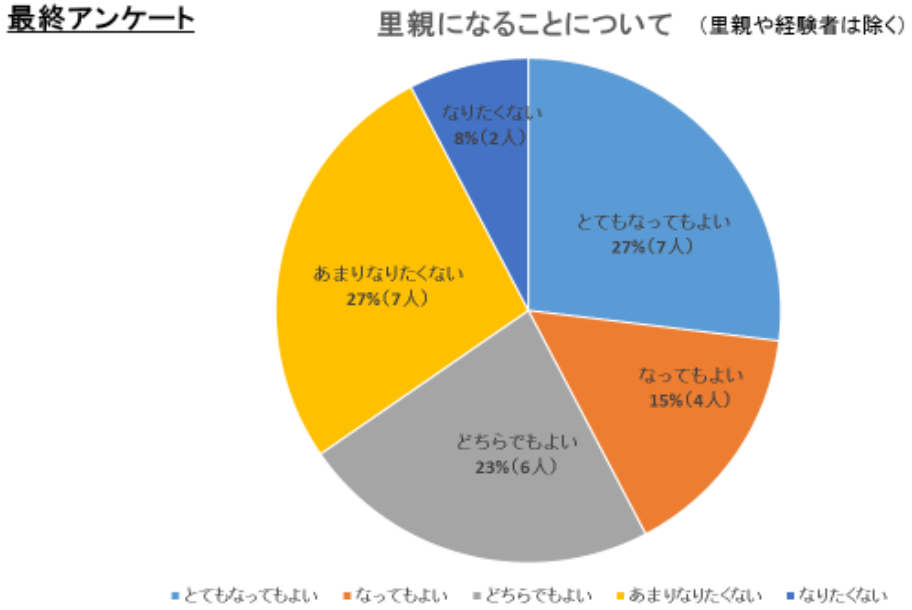
最終アンケート



最終アンケート



「里親になってみたいのか」の質問で、「里親にとてもなってもよい」は２７％（７人）、「なってもよい」１５％（４人）（４２％、里親自身を除く２６名を対象）、第２講座直後（第２講座のみ受講）受講者の意識調査（3 名）よりも大幅に人数が増えている。これは、他のテーマ受講者の中に肯定的な意識を持っていた人がいたためと考えられる。１１名の内訳は、里親関係（5 名）、不登校関係（2 名）、子育て・地域社会活動関係（4 名）であった。この結果からも、多領域で里親の問題を取り上げることが、里親の登録向上につながると考えられる。特に、子育て・地域社会活動関係者をどう巻き込むのかが重要である。



⑤ インタビューによる質的分析

＜里親会の会長への聞き取り＞

・里親への聞き取り（里親会会長）不登校やひきこもりの当事者の話をきいて、他人の子ども、特に心の傷をもっている子どもを育てている里親の子育てについて自信がもてた。

・実親以上の親になれる自信がみえてきた。

・不登校やひきこもりの当事者の話をきいて、里親をしていると聞けない話であったので、視野が広がった。

・実親と里親の関係について、里親としての態度が明確になった。「里子が独り立ちするまで面倒をみさせてほしい」と説明することが大切ではないかと思った。

・他の領域の人との横のつながりが大切と改めて思った。学ぶことが多かった。

・4 回とも行くつもりは、最初なかったが、参加した。よかった。

＜里親への聞き取り＞

・自分の人生自身をみなおして、今自分にできることをしようと思える踏ん切りがついた。やっと整理がついた。

・講演者（子育て支援関係）と直接に連絡をとって、一緒になって「ホームスタートの事業」に取り組むプロジェクトがたちあげつつある。今回の研修のつながりによって生じた。

＜行政への聞き取り＞
・里親の制度説明会に、受講者が１名来た。
・新規開拓というよりも、登録している里親さんがいろいろな人との交流（ワークショップ）にでて視野が人がったのではないか。
・養子縁組の中には不登校になる時もある。そのようなときにも、講演した子育て支援の人たちのところにいけたらよいのではないか。そのような情報を知る機会になる。
・意識の高い人に里親のことが伝わったことはよかったのではないか、そのような人たちを通して口コミで里親の情報が広がったらよいと思う。
・里親さんの成長は必要であるが、それを行政では提供しにくい。インフォーマルな関係が必要である。それを提供できるのではないか。
・里親の会に、講演した方を講師に呼ぼうと会長がいっていた。たいへんよい機会になった。今後も、色々な「化学反応」が生じるのではないか。

６　まとめ（結論）

里親委託推進のための地域基盤づくりについて、実践（エビデンス）をもって、その仕組みの有効性について検証しようとした。社会的養護のみの研修会でなはなく、地域づくりや子育て支援、その中でも困難な子育てである不登校・ひきこもり・児童虐待などを組みわせた講演の内容であるからゆえに多様な領域で幅広い年齢の人が集まってくる。そのような多様な顔ぶれをつなぐ具体的な仕組みである「ワークショップ」によって、受講者同士の対話を生み出すような構造を有したプログラムによる研修講座を企画した。

研修講座は、広報活動が１か月弱の短期間であり、かつ、平日での実施であったが、実数85名、各講座35名程度の方（のべ135名）が集まった。第１講座の不登校・ひきこもり・児童虐待に関するテーマでは、「コミュニティ意識」をみると、「地域への愛着」と「他者依頼」が低く、地域の中で、あるいは他者との関係でとらえることが難しいテーマであることがわかった。

第１講座（不登校・ひきこもり・児童虐待）のワークショップを通しての体験過程では、「違和感」が強く体験されており、その「違和感」が受講者の視野の広がりにもつながっていく可能性があると考えられる。

里親のインタビューから、里親の場合、不登校やひきこもりに出会いことがなく、不登校やひきこもりの関係者や当事者からの講演は、多くの学びにつながったことがわかった。

第２回目の社会的養護や里親のテーマでは、里親自身（当事者）による講演があった。それによって、里親への理解や態度は、里親理解の方向に変化することが分かった。つまり、知識や具体的な説明の不足によって、里親になりたいと思う気持ちが促進される可能性が

あった。

しかし、一方で、社会的養護や里親の内容だけでは、ワークショップを通しての「他者理解」は高いものの、「自己発見」や「自己表出」、「自己受容」の点（自己理解）では低めであり、効果が限定的であることが推察された。これらの自己の成長については、子育て支援や地域づくりの講座において大きな変化がみられた。したがって、これらの講座を組み合わせることで、社会的養護の問題だけに閉鎖的にならずに、他者理解とともに、自己理解が進むことが考えられる。

第 3 講座、第 4 講座と、ワークショップの受講者が増えていく傾向にあった。里親自身の継続的な受講者も多く、その理由をきくと、学ぶ点が多かったとの意見があった。里親自身も学ぶ場所を求めていることも推察された。

講座によって知り合って、講座終了後、乳児院と大学との間に交流が生じたり、他には、子育て支援のホームスタートと里親の一人がつながって、里親が訪問への地域活動をはじめることになった。また、里親の会に、講演者の一人が呼ばれることとなった。これはほんの一端にすぎないが、ワークショップによって人と人がつながり、それぞれの課題を補完するかたちで新しい関係性が生じてくる機会となっていた。プラットフォームの「結合」と「創発」の概念から説明ができる。

ワークショップはわずかな時間（90 分）であったが、受講者同士の「つながった」人の数は多い人では 15 名にも及ぶ。多領域のつながりによる地域基盤づくりが期待される。

また、里親の制度説明会には受講者の 1 名が受講された。第 2 講座講演後に実施したアンケートでは、「里親になってもよい」という意識をもった人が 1 名⇒3 名に増えた。

また、事後の郵送による「最終アンケート」（回収率５３．８％）では、「里親にとてもなってもよい」は 27%（7 人）、「なってもよい」15%（4 人）（計 42%）と答えており、第 2 講座講演直後の結果（3 名）よりも大きく増えている。内訳は、里親関係（5 名）、不登校関係（2 名）、子育て・地域社会活動関係（4 名）であり、里親関係者だけでなく、多領域で里親の問題をとりあげること、特に、子育て・地域社会活動関係者に登録向上の鍵がある。

里親になるためには、40 代～60 代ぐらいが体力的にも経済的にも適切であろうと思われるが、その年齢の方々の割合が 67%であった。

以上、社会的養護だけではなく、地域づくりや子育て支援との相互作用を生ぜしめるような仕組みをもった地域基盤づくりのプログラムの重要性とその仕組み、効果の具体を示せたと考える。この仕組みは、コストがかからず高い効果が期待できる。また、全国の地方中小都市部において適応の可能性を示唆している。

謝　辞

この度の調査委託事業におきまして、ご協力頂いた受講者の皆様、里親会の皆様、講演者の皆様、心よく後援して下さった関係機関の皆様、事務的なお手伝いを下さった河上さん、院生さん、大学事務関係の皆様、心より感謝申し上げます。　　竹森　元彦

別添　資料

・チラシ
・振り返りシート
・調査協力承諾書
・フェイスシート
・里親理解のアンケート
・コミュニティ意識尺度
・体験過程尺度
・最終アンケート

青少年育成支援コーディネーター養成講座

事前申込を

午前午後のみでも参加可能

入場無料

「地域でつながる子どもの未来」

（厚生労働省委託　地域基盤づくり　モデル調査事業）

地域で子育てを。

家族は核家族化して、夫婦共働きが増え、中には離婚される家庭もいらっしゃいます。親子間の子どもとの関わりは家族によってまちまちであり、保護者はどのようにかかわってよいのかわからなくて子育てに悩むことも多いです。多様な専門家が支援を行う体制を整えていますが、専門家同士の交流や相互補完、現状の共有などが求められます。いろいろな立場の大人たちが本音を話しながら助け合っていくことが共助の社会づくりのために必要です。今回は、「地域社会による子育て（社会的養護）」に焦点をあてて講座を開催します。

多くの方々が集い、多様な地域の課題を共有し、それを互いに受け止めながら語り合うような場とします。一つ一つの講座に心を込めております。どうぞご参集をお願いします。

研修講座コーディネーター　香川大学　竹森元彦

第1講座　2月12日（金）　子育てをめぐる地域や家族の抱える課題 －不登校・ひきこもり・児童虐待のいま－

10：00～12：30　講師の講演会と意見交換　13：30～15：00　ワークショップ

〔場所〕　社会福祉総合センター　7階　第1中会議室

1　居場所で育つ不登校児たち　（適応指導教室　室長）
2　ひきこもりの若者の現状とメッセージ　（ひきこもり親の会）
3　児童虐待の現状と課題　（香川県子ども女性相談センター）
（講師との意見交換　「子どもや家族、若者の抱えた課題と未来に向けて」）

第2講座　2月23日（火）　地域社会による子育て（社会的養護）の現状と未来

10：00～12：30　講師の講演会と意見交換　13：30～15：00　ワークショップ

〔場所〕　社会福祉総合センター　7階　第2中会議室

1　社会的養護の現状と課題　（香川県子ども女性相談センター）
2　児童養護施設の現状と未来　（児童養護施設讃岐学園）
3　「出会いから広がる未来」　（香川県里親会）
（講師との意見交換　「地域でつながる子どもの未来」）

第3講座　3月 2日（水）　親子の心を結ぶために　－親子関係の力を拓く－

10：00～12：30　講師の講演会と意見交換　**13：30～15：00**　ワークショップ

〔場所〕　社会福祉総合センター　7階　第1中会議室

1　子育てに悩む親同士の学びあいを支える　（児童心療内科医　医師）
2　地域の中の親子の居場所づくり　（さぬきっずコムシアター　代表）
3　“子育ての先輩があなたのおうちにきてくれます”（ホームスタート・おりーぶ）
（講師との意見交換　「親子の本来の力を拓くために」）

第4講座　3月11日（金）　地域で育つ子どもたち、居場所でつながる大人たち

10：00～12：30　講師の講演会と意見交換　**13：30～15：00**　ワークショップ

〔場所〕　社会福祉総合センター　7階　第1中会議室

1　おやじがつなぐ地域のきずな　（さぬきおやじ連合）
2　地域の居場所で生まれたもの　（地域の家ココカラハウス）
3　地域に学ぶ子どもたち　（香川大学教育学部附属高松小学校）
4　地域をサポステに！「若者支援員」という新たな取り組み（若者サポートステーション）
（講師との意見交換　「地域で子どもたちに何ができるのか？」）

参加申込書

（申し込みは、各講座50名程度と考えております。先着順ですので、お早めにお申し込みください。）

下記の参加申込用紙に、氏名・住所・電話番号をご記入の上、送信してください。
（ご都合によって、受講できない講座がある場合もかまいません。）

氏　　名	住　　所	電話番号

【香川大学　教育学部　竹森研究室まで　Faxか メールにて】　TEL：087-832-1495

〔Fax〕 087-832-1495

〔メール〕 takemori@ed.kagawa-u.ac.jp

○香川大学教育学研究科附属心理臨床相談室　HPにも掲載しております。

●主催：香川大学
●後援（予定）：香川県、香川県教育委員会、社会福祉法人香川県社会福祉協議会、香川県里親会、NPO法人KHJ香川県オリーブの会、さぬきおやじ連合、NPO法人子どもの虐待防止ネットワーク・かがわ、NPO法人さぬき自立支援ネットワーク、NPO法人さぬきっずコムシアター、NPO法人子育てネットひまわり、ペアレントサポートはぴまま企画、ぬくぬくママsun's、地域の家ココカラハウス、香川県社会福祉士会、香川県臨床心理士会、香川県青少年育成支援コーディネーターの会

振り返りシート

「地域でつながる子どもの未来」

（厚生労働省委託　地域基盤づくり　モデル事業）

氏名：

所属（あるいは関係する領域）：

〇研修を通して感じたこと・考えたこと・学んだこと等、自由に記述してください。

第１講座（２月１２日）　〔午前・午後・全日〕参加	・今回の研修を通して、知り合いになった人数　（　　）人 ・知り合いになった人の名前
第２講座（２月２３日）　〔午前・午後・全日〕参加	・今回の研修を通して、知り合いになった人数　（　　）人 ・知り合いになった人の名前
第３講座（３月２日）　〔午前・午後・全日〕参加	・今回の研修を通して、知り合いになった人数　（　　）人 ・知り合いになった人の名前
第４講座（３月１１日）　〔午前・午後・全日〕参加	・今回の研修を通して、知り合いになった人数　（　　）人 ・知り合いになった人の名前 ありがとうございます。 研修おつかれさまでした。

調査協力承諾書

１　モデル調査事業としての本研修講座の目的

本研修講座は、厚生労働省の委託事業です。具体的には、地域の社会資源を活用して、地域社会で子育て（社会的養護）をする地域基盤づくりの在り方を検討するモデル調査事業です。ご参加くださった受講者の皆様に生じた変化、地域基盤づくりにどのように影響をしたのかなどを調査して、今後の地域基盤づくりに役に立てることも大きな目的であることをご了解ください。ご参加の皆様にはご負担をおかけしますが、ご理解とご協力の程お願い申し上げます。

２　受講予定日程　（参加予定の研修に〇をつけてください。）

	全日	午前	午後
第一講座（２月１２日）			
第二講座（２月２３日）			
第三講座（３月２日）			
第四講座（３月１１日）			

３　モデル調査事業への協力承諾書

本研修講座の「調査事業」としての趣旨について理解し、アンケートやインタビューなどの調査に協力をすることについて承諾をお願いします。インタビューについては個別にご相談のうえ、協力の可否はご意思を最優先いたします。また、研修講座の記録のために、録音などをする場合があります。

なお、ご協力いただいたアンケートなどは、数量的・統計的に処理いたします。個人を特定することを目的としたものではありません。また、事業終了後に、それらの資料は破棄いたします。

事業責任者　香川大学　竹森　元彦
高松市幸町１－１
０８７－８３２－１４９５

以上の内容を理解し、本モデル調査事業への協力を承諾いたします。

日　付　　年　　月　　日

住　所
氏　名

フェイスシート

初めに次の質問にお答えください。

①　性別　（男・女）

②　年齢　（〇をつけてください）

20～24 歳 / 25~29 歳 / 30~34 歳

35～39 歳 / 40~44 歳 / 45~49 歳

50~54 歳 / 55~59 歳 / 60~64 歳

65~69 歳 / 70 歳以上

③関係する領域について教えてください

（例：子育て支援、教育、福祉、保健医療、里親、心理職、
行政、ケースワーカー、不登校、引きこもり、虐待関係･･･など）

里親さんに関するアンケート

○このアンケートは、あなたが里親さんについてどれくらい理解されているのか伺うものですので、率直に、お答えください。
○結果は、数量的・統計的に分析します。個人を特定することを意図するものではありません。
○補足説明・ご意見・ご感想などは、空白部分にご記入いただくか、最後の欄にご記入ください。
○当てはまるもの１つに○をつけてください。

１　里親には、養子縁組をする里親、一時的に子どもを預かる養育里親等の種類があることについてご存知ですか？

よく知っている　／　知っている　／　聞いたことがある　／　知らない

２　養育里親の制度についてどの程度関心がありますか？

とても関心がある　／　関心がある　／　少し関心がある　／　あまり関心がない

３　養育里親に自分がなることに関心がありますか？

とても関心がある　／　関心がある　／　少し関心がある　／　あまり関心がない

４　里親さんのことを知っている、あるいは里親さんとお話されたことがありますか？

（　）よく知っている方がいて話をしたことがある。（　）知っている方がいるが話をしたことはない。
（　）メディア等を通じて知っている。　（　）あまり知らない

５　ご自身が養育里親になって、子どもを預かってもよいと考える気持ちがありますか？

（　）なってみたいという気持ちがある。　（　）なってみたいという気持ちが少しはある。
（　）なるつもりはあまりない。　（　）なるつもりは全くない。
（　）よくわからない。

６　養育里親について、身近な知り合いに説明をしたり、勧めてみたいと思いますか？

（　）紹介したり、勧めてみたいと思う。　（　）説明したいと思う。
（　）あまり思わない。　（　）よくわからない。

７　養育里親にとって、地域からの理解やつながりが大切と思いますか？

とてもそう思う　／　そう思う　／　あまり思わない　／　思わない　／　よくわからない。

８　養育里親が地域社会でもっと理解されるように働きかけたいですか？

とてもそう思う　／　そう思う　／　あまり思わない　／　思わない　／　よくわからない。

９　<u>１～８について、補足の説明・ご感想・ご意見等がありましたら、是非、ご自由にお書きください。</u>

●コミュニティ意識に関するアンケート　実施日：　月　日（午後・午後）

次の質問のそれぞれについて、あなたにどの程度当てはまるかを考え、該当する選択肢1つに○をつけてください。		とても当てはまる	やや当てはまる	どちらでもない	あまり当てはまらない	当てはまらない
1	地域でのボランティアなどの社会的活動に参加したい。	5	4	3	2	1
2	地域での問題の解決には、地域住民と行政の対等な関係を築くことが重要である。	5	4	3	2	1
3	いま住んでいる地域に、誇りとか愛着のようなものを感じている。	5	4	3	2	1
4	自分の住んでいる地域で住民運動が起きても、できればそれにかかわりたくない。	5	4	3	2	1
5	地域社会全体で子育てを支えていくことが大切だと思う。	5	4	3	2	1
6	住み良い地域づくりのために自分から積極的に活動していきたい。	5	4	3	2	1
7	地域をよくするためには、住民がすることに行政の側が積極的に協力すべきだ。	5	4	3	2	1
8	この土地にたまたま生活しているが、さして関心や愛着といったものはない。	5	4	3	2	1
9	地域をよくするための活動は、熱心な人たちに任せておけばよい。	5	4	3	2	1
10	地域の人々が、子どもや子育て中の親と触れ合うことは大切であると思う。	5	4	3	2	1
11	地域のみんなと何かをすることで、自分の生活の豊かさを求めたい。	5	4	3	2	1
12	地域をよくするためには、住民みずからが決定することが重要である。	5	4	3	2	1
13	人からこの地域の悪口をいわれたら、自分の悪口をいわれたような気になる。	5	4	3	2	1
14	地域の環境整備は行政に任せておけばよい。	5	4	3	2	1
15	自分の時間を地域の子ども達や子育ての支援に使いたい。	5	4	3	2	1

●体験に関するアンケート　　実施日：　月　日

次の質問のそれぞれについて、あなたにどの程度当てはまるかを考え、該当する選択肢1つに〇をつけてください。		とても当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	当てはまらない
1	いろんな人と知り合うことができた。	5	4	3	2	1
2	自分自身についての新たな発見があった。	5	4	3	2	1
3	不快な気持ちも表現することができた。	5	4	3	2	1
4	自分のことを話すのに戸惑いがあった。	5	4	3	2	1
5	他の人の気持ちを受け入れることができた。	5	4	3	2	1
6	自分に自信が持てた。	5	4	3	2	1
7	みんなとの（心理的な）距離が近くなったように感じた。	5	4	3	2	1
8	自分の意外な一面に気づいた。	5	4	3	2	1
9	自分のことを積極的に話すことができた。	5	4	3	2	1
10	自己嫌悪におちいることが多かった。	5	4	3	2	1
11	他の人の話を聞いて共感できた。	5	4	3	2	1
12	自分で自分のことを受け入れられるようになった。	5	4	3	2	1
13	ふだんあまり話をしない人とも安心して話ができた。	5	4	3	2	1
14	自分の行動や感じ方の癖に気づいた。	5	4	3	2	1
15	いろんなことをホンネで話せた。	5	4	3	2	1
16	自分のことがよくわからなくなった。	5	4	3	2	1
17	他人の考え方を尊重することができた。	5	4	3	2	1
18	自分はこれでよいと思えるようになった。	5	4	3	2	1
19	みんなに自分のことを話してもよいという気になった。	5	4	3	2	1
20	自分とは違う意見を聞いて新たに気づかされることがあった。	5	4	3	2	1
21	他の人と考えが違っていても、自分の意見が言えた。	5	4	3	2	1
22	自分は他の人よりも劣っていると感じた。	5	4	3	2	1
23	自分と違う考え方を聞いても受け入れることができた。	5	4	3	2	1
24	自分は前向きになれたと思う。	5	4	3	2	1
25	みんなに受け入れてもらえたという感じがした。	5	4	3	2	1
26	自分の新たな可能性が見出せた。	5	4	3	2	1
27	言いたいことをじゅうぶんに伝えることができた。	5	4	3	2	1

28	自分ひとりだけが取り残されているように感じた。	5	4	3	2	1
29	相手の立場に立って話を聴くことができた。	5	4	3	2	1
30	自分自身に対して満足できるようになった。	5	4	3	2	1

講座の体験に関するアンケート調査

はじめに

　このたびは、「地域でつながる子どもの未来」（厚生労働省委託　地域基盤づくり　モデル調査事業）に受講されまして、誠にありがとうございます。モデル事業ですので、受講者への調査を行って、今後の事業の助けにしていきたいと思います。アンケートへのご記入とご返送について、なにとぞよろしくお願いします。

（平成２７年度事業なので、スケジュールが大変タイトになっております。到着後すぐに、分析をするという流れになりますので、アンケートの締め切りが短く設定されている点、ご迷惑をおかけしますがよろしくお願いします。）

　この結果は、統計的に処理され、また個人を特定することを目的とするものではありません。アンケートの調査の結果やご意見やご感想は、地域活動の新たなモデルのために活用させていただきます。講座を通して感じたことや学んだこと等を率直にまたできるだけ具体的にお願いします。

１　性別（男・女）　　２　年齢（　　）才

２　関係領域（関係する領域に○をつけてください。複数回答可）

・子育て支援関係　・ひきこもり関係　・里親関係　・地域社会活動　・不登校関係　・虐待支援関係

３　参加した講座　（各講座別に、午前、午後に○をつけてください）

第１講座（午前、午後）　　第２講座（午前、午後）

第３講座（午前・午後）　　第４講座（午前・午後）

４　受講者ですか、講演者ですか？　（　受講者　・　講演者　・　両方）

締め切り：３月３０日（水）（必着）

各回の講座は、前半は、地域で活躍する講演者の講演、後半は、顔を見合わせての話し合いによって構成されておりました。

全体テーマは、社会的養護（地域社会による子育て）について。第１講座（２月１２日）にて、子育てをめぐる子育ての課題（不登校、ひきこもり、児童虐待)、第２講座（２月２３日）にて、社会的養護（地域社会による子育て）と里親、児童養護施設の現状と課題、第３講座（３月２日）にて、親子の関係を拓く支援（親同士の学びを支える、地域の親子の居場所づくり、子育て訪問支援)、第４講座（３月１１日）にて、地域社会づくり（おやじの会、地域を通しての教育、地域の居場所づくり)。

「あなたが、モデル事業の講座に参加されての感想や気づいたことについて、以下の問１～問１２の項目について、教えてください。」

問１　受講終了後、どのようにお感じですか？

（たいへん満足であった・やや満足であった・どちらでもない・やや満足できなかった・たいへん満足できなかった）

問２　受講されて、どのような点が良かったとお考えですか？
下の項目から選択してください。（複数回答されても構いません）

・不登校・ひきこもり・虐待などの現状と課題等について学ぶことができた点
・社会的養護（地域社会による子育て）の重要性や必要性について学ぶことができた点
・里親さんから直接に話をきけて、里親さんの現状や課題について学べた点
・子育て支援や居場所活動など地域で活躍されている講演者から直接に学べた点
・講演者と受講者、受講者と受講者の横のつながりやネットワークの重要性を感じた点
・地域で活躍する講演者や他の受講者の熱意や前向きさを感じた点
・話し合い（ワークショップ）が、今後の生活や地域支援にとても役に立つと感じた点
・話し合い（ワークショップ）において、自分の気持ちや考えを表現したり、他の受講者の気持ちや考えを聴くことができた点
・社会的養護のために連携・協力する重要性を感じた点
・当事者が語るのでとても説得力を持っていた点。
・社会的養護（地域社会による子育て）についてさらに学んだり、社会活動などに積極的に取り組みたいと思えた点

問３　問１以外に、良かった点があれば、ご自由にお書きください。

問４　そのほか、気が付いた点があれば、どのようなことでもご自由にご記入ください。

問５　地域の課題である不登校、ひきこもり、虐待について、理解が深まりましたか？　また、どのような点に気づかれましたか？

（とても深まった・深まった・どちらでもない・あまり深まらなかった・深まらなかった）

どのような点が？　教えてください

問６　日常生活や地域活動において、どのように役にたちそうと感じましたか？　何かこれからできそうなことが思い浮かびましたか？　教えてください。

（とても役に立ちそう・役に立ちそう・どちらでもない・あまり役に立たなさそう・役に立たなさそう）

どのような点が役に立ちますか？　また、何かできそうなことが思いつけば教えて下さい

問７　社会的養護（地域社会による子育て）や里親、児童養護施設の重要性について、受講前に比べて、理解は深まりましたか？　どのように深まりましたか？

（とても深まった・深まった・どちらでもない・あまり深まらなかった・深まらなかった）

どのような点が？

問８　里親さんになることについて、どのようにお考えですか？

（とてもなってもよいと感じた・なってもよいと感じた・どちらでもよい・あまりなりたいとは感じなかった・なりたく感じなかった）

どのようなことを考えましたか？

問９　自分の生活の中や地域支援活動において、里親さんの情報について知らせていきたいと感じましたか？

（とてもそう思う・そう思う・どちらでもない・そう思わない・とてもそう思わない）

問１０　受講されたことで、どのようなつながりができましたか？　関係領域とは別の領域の方との「横のつながり」をもつことはどのようによいとお考えですか？

（とてもつながりができたと感じた・つながりができたと感じた・どちらでもない・つながりはあまりできなかった・つながりはできなかった）

（問１０の続き）
横のつながりを持つことはどのように？

問１１　受講によるつながりによって、あなたの活動に生かされたとか、何か助け合いに展開した具体的な例があれば教えてください。
（例：講演者や受講者の誰かに相談をしたとか、相談したら安心したと思えたなど。何か、助け合いに展開したような例がありますか？　）

（とても活動に生かされそう・活動にいかされそう・どちらでもない・あまり活動にいかされなさそう・活動に生かされなさそう）

展開や受講者同士の助け合いなどは？

問１２　本事業や講座について、ご意見など、ご自由にお書きください。

締め切りは、３月３０日（水）必着です。同封の封筒に入れて、お早めに返送下さい。（もし期日に遅れてました場合でも、ご返送をよろしくお願いします。）

ご協力、感謝いたします。

研究責任者・コーディネーター　香川大学教育学研究科竹森元彦
高松市幸町１－１　087-832-1495　takemori@ed.kagawa-u.ac.jp

平成 27 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業
『里親等委託推進のための地域基盤づくりに関する研究』（報告書）
研究代表　香川大学教育学部　竹森元彦

発行日 2016 年 3 月 31 日
著　者　竹森元彦
住　所　７６０－８５２２
高松市幸町１－１
087-832-1495（研究室）
takemori@ed.kagaw-u.ac.jp
製　本　美巧社